

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22530121

研究課題名（和文）

政治思想としてのシュンペーター晩期資本主義社会論研究

研究課題名（英文） Schumpeter's idea of the last-stage capitalism as a political thought

研究代表者

布施 哲 (FUSE SATOSHI)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：60345840

研究成果の概要（和文）：

ヨーゼフ・シュンペーターの「資本主義終末論」の概念は、中間層、ブルジョアジーの消滅を前提にしている。本研究は、彼の仮説の妥当性を明らかにするとともに、その政治的効果—市民社会のラディカルな変容とポピュリズムの台頭—が、「直截性のイデオロギー」として理解可能であることを解明した。

研究成果の概要（英文）：

Joseph. A. Schumpeter's apocalyptic idea of "the end of capitalism" postulates the disappearance of the middle class and/or (petit) bourgeoisie. This research made it clear that today's economic situation around the world bears witness to the adequacy of Schumpeter's hypothesis, and revealed its political effects – radical transformation of so-called "civil society" and the rise of populism -- , which could be construed as "the ideology of immediacy".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：資本主義、政治思想、哲学、イデオロギー分析、政治理論

### 1. 研究開始当初の背景

シュンペーターが経済学の領域で残した功績が巨大なものであることは言を俟たないだろう。古典的な一般均衡理論からはじまり、現実の経済が絶え間ない革新(「イノベーション」)を経て動いているという、いわば経済変動の理論を展開、定着させたことで、彼の名はこんにちまで広く知られている。のみならず、学問の外の世界、つまり一般のビジネスマンのあいだでさえ、「イノベーション」あるいは「創造的破壊」、「アントレプレナー」などといったシュンペーターの用語はあま

ねく流通している。

しかしながら、彼がその研究活動の後期に思い描くにいたった資本主義社会の未来に関する見取り図は、(当然ながら)実業の世界では現在ほぼ等閑視されている。その見取り図とは、すなわち、交換システムとしての資本主義の不可避的な終焉と社会主義の到来である。

晩年のシュンペーターは資本主義の未来に対してはとても悲観的であった。「創造的破壊」ということでは、晩期資本主義社会にあっては「創造」の余地が限りなく狭ま

ってゆき、「破壊」、つまり、資本主義の資本主義自体による自己破壊のみが表面化・顕在化して、現下の経済システムはどうにも立ちゆかなくなるだろう、というのが彼の予測だったのだ。

アメリカ経済学会の就任演説でも公言されたシュンペーターの資本主義“終末論”は、経済学としての実用性の無さはむしろ、彼のそれまでの経済理論研究とは性質が鋭く異なっていたこともあり、その後の経済学界で大きな主題系として採り上げられる機会を徐々に失ってゆくことになる。他方、学問的プロセスは措くとしても、結論としてはかなり親和性が高く、共有されてしかるべき要素が多かったはずのマルクス主義系社会科学の研究者たちのあいだでも、ごく一部の例外を除けば、後期シュンペーター政治社会論に関する体系的な議論は、十分に展開されてきたとはいえない。

近代社会における経済と政治との不可分離性という観点から両者を架橋してきたはずのマルクス主義陣営においてさえ、きわめてマイナーな話題という位置づけしかなされてこなかった以上、シュンペーターの晩期資本主義論ならびに政治社会論が、いわんや政治学者たちのあいだで真正面から論じられることは必然的にきわめて稀な状況となっていたのである。「市民」や「契約」あるいは「自由」の概念すら、晩期資本主義社会では消滅するだろうと予測していたシュンペーターの政治社会論が、現代の政治学者たちによって論じられることが少ないのは、「学問領域の違い」では済まされない知的怠惰なのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

オーストリア出身の経済学者、ヨーゼフ・シュンペーターの政治・社会思想を再検討し、その今日的意味と意義を探求する。とりわけ、晩年のシュンペーターが強めていった資本主義に対する彼の悲観に着目しつつ、①彼の基本的発想や著作に見られるいくつかの重要な哲学的諸要素を分析、②当時の国内外(亡命先の米国)の状況をも踏まえ、③さらには、ほぼ同時代の思想潮流として西欧マルクス主義者たちの諸言説を比較検討したうえで、経済思想家としてではなく、政治・社会思想家としてのシュンペーター像を浮き彫りにしてゆく。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1)内在的アプローチ、(2)時代考証、(3)西欧マルクス主義との比較検討という3つのアプローチが有機的に絡みつつ進んでゆくが、いずれの場合も、実際の作業は最終的にオーソドックスなテキスト分析を経て一編の報告書へと収斂することにな

る。

(2)と(3)はそれぞれ、当初は資料収集のための海外出張を要するものと想定されていたが、シュンペーターの研究履歴ならびに各種資料は、すでに先行研究によって相当程度整えられており、予算も限られていたためにこれを取り止めた。

しかしこれとは逆に、シュンペーター理論を政治・社会思想として考察する研究、とりわけそれを領域横断的に研究する試みは、当初予想されていたよりもはるかに少なく、事実上、自身ですべてを構想する以外になかった。そうした理由から、国内の研究者を招聘したシンポジウムや勉強会を開き、意見交換をおこなう機会を相対的に増やさざるを得なかったが、経済学、精神分析学、思想史、哲学の各領域の研究者との意見交換は、結果的にはいずれも非常に実りの多いものであった。

## 4. 研究成果

シュンペーターの“資本主義終末論”において提出された見取り図に即した場合、どのようなイデオロギー的、政治言説的効果が同時並行的に生じると考えられるかについて、本研究は一定の方向性を打ち出した。

シュンペーターの予測によれば、資本主義過程(capitalist process)は、①商品の差異を飽和させ、労働実績を平板な数値に置き換える結果、労働者から労働意欲と労働にまつわる諸倫理(勤務先への忠誠、収入に対する家族への責任意識、納税義務意識等)を奪い、②さらには資本主義過程そのものが内包する自己破壊的傾向(創造的破壊における“創造性”の消失)によって、システムそれ自体に対する批判的言説(種々のメディア産業)を台頭せしめる。そして最終的には、③「イノベーション」や「アントレプレナー」が生起する余地を自ら喰い潰してそれ自体を終焉させる、というものであった。この一連の流れは、資本主義はそれ自身の成功によって崩壊する、というシュンペーターのよく知られたテーゼにおいて集約的に表現される。

本研究は、そうした過程に付随する政治的・社会的反作用を明確化した。それはすなわち、a)「イノベーション」の不可能性から生じる商品の差異の消失とともに、その症候的な現象として「無媒介/直截的なもの」への希求が一般的に生じるのであり、それと並行して b)資本主義社会における良き市民＝労働者＝消費者は、中間搾取、代議制を通過しない「無媒介な/直截的」指導者を熱望するようになると同時に、自らはマルクスというルンペンプロレタリアートに限りなく近接してゆく、ということである。さらに、c)資本主義システム内における批判的言説は、批判そのものの自己批判、思考すること

の否定と行動の直截性に、よりいっそう惹かれるようになる。これが帰結せしめる現実の政治変動は、ある種のポピュリズムの到来であり、最悪の場合、一人の独裁者による専制、すなわち、ボナパルティズムの到来が可能性として浮上してくる。

ボナパルティズムについて考察する際に参照点となったのは、この概念の唱道者であるカール・マルクスの分析であるが、本研究ではこれに加えて、アルゼンチン出身の政治理論研究者であるエルネスト・ラクハウが最初期におこなったペロン主義研究を重要な補助線として用いた。

フアン・ペロンが戦後のアルゼンチンで築いた体制は、ひとしなみに「左翼独裁」などと呼べるものではない。ペロンは、左翼も右翼も中道も、そして何より、都市部にあふれかえる浮浪者層、マルクスが「ルンペンプロレタリアート」として蔑んだ、社会から完全に放逐された人々をも支持者層として取り込み、政治権力を掌中に収めることに成功した。しかしここで注意すべき点は、ペロンがクロムウェルや皇帝ルイ・ボナパルトのような、かつての古典的独裁者とは性質を異にしていたということである。ペロンのイメージは、強力無比な権力を一手に握って君臨する“大いなる父”というよりは、むしろ(陳腐な言い方をすれば)すべてを包み込む“母”のそれに近かった。ペロンの二番目の夫人であるエビータが絶大な人気を誇っていたこと、そして「ペロニスタ」と呼ばれる熱烈なペロン支持層がアルゼンチンで現存している事実は、ペロンがひとりの突出した例外的英雄というよりは、ラクハウ自身の語を用いれば、さまざまな覇権の諸力の「媒介者」であったことを物語っている。複雑な層によって構成されるアルゼンチン社会では、既得権益層を殺しも生かしもせず、魅力的な政治的標語とともにあらゆる層の人心をとらえる風呂敷のような権力者こそが、唯一専制的な統治を成し得た、とラクハウは主張するのである。

上記のようなボナパルティズム状況と、先述のとおり仮定されたシュンペーター的「晩期資本主義」における社会状況を比較すると、興味深い相同性と差異が浮かび上がってくる。前者はむしろ、経済の危機によって惹起されるポピュリズムの諸特徴が前景化されるということだ。商品世界にあって価値の源泉たる商品間の差異が漸次的に希薄化してゆく過程、それにともない、業種を問わず労働者の所得が全般的に低下し、“市民”としての生活が徐々に、しかし顕著に不安定になってゆく過程においては、そうした「無差異」もしくは「差異」の無効それ自体を代表・表象してくれる政治的行為者(個人であれ政党であれ)が希求されるようになる。ボ

ナパルティズムではそれが特定の一人に収斂されるが、シュンペーターはそこに「社会主義」の到来を予測した。

他方、本研究で措定されたシュンペーター的「晩期資本主義」の社会状況では、ペロンのような「媒介的」独裁者は、実のところ意味をなさない可能性が高い。というのも、封建的大規模地主、都市部のブルジョア層、ルンペンプロレタリアート等々の諸力が“諸力”として覇権争いをしてきた当時のアルゼンチンとは異なり、「晩期資本主義」にあつては、それら各層が「媒介」されるまでもなくそろって弱体化するからである。シュンペーターの予測では、資本主義体制下にある限りにおいて、経済的に分類され得る各層は、例外なく没落の一途をたどるのである。

本研究は、そうしたシュンペーターの仮説を起点とした場合、資本主義的差異の体系を前提としない政治的力学の在り様についていま一段の考察を進める予定であったが、この点に関しては十分な青写真を描くことができなかつた。ただ、「無媒介性/直截性のイデオロギー」は確かに古典的な独裁へと収斂してしまう可能性をつねに内包するものではあるが、同時に、それがボナパルティズムの担い手たる一者でも、あるいは利益追求の担い手たる“諸力”でもない、それまでの政治的行為者とは質的に異なる多様な政治的担い手の産出を導く可能性をも秘めていることは付言しておきたい。経済の“危機”は、政治的に見て、必ずしも危機であるばかりではない。

以上のように、本研究は、シュンペーターの業績がひとり経済学のみならず、現代政治理論の研究・発展においてもきわめて重要な位置を占めて然るべきであることを論証してきた。“イノベーション”、“創造的破壊”、“信用創造”などといった、アカデミズムの外でさえ流通している諸概念のみがシュンペーター理論における主要な関心事となる一方、彼が終生捨てることがなかつた社会主義(≠共産主義)へのこだわりや、マルクスへのアンビバレントな敬意、そしてそれらの下地となっている分厚い哲学的教養と歴史認識は、“本職”の片手間で蓄積された“副業”の産物であるかのごとくに扱われる傾向にあり続けたまま現在にいたっている。しかし、シュンペーターの経済理論を精査してみると、彼が提出した中心的諸概念の多くには、まさにそうした“副業”の影が抜き去りがたく滲み込んでおり、しかもそれらは本質的に近代政治社会、とりわけ議会制民主主義の成立と密接に関わっているものであることがわかる。言い換えれば、シュンペーター経済学における“非経済学的”諸前提ならびに諸概念は、すぐれて政治的なものをめぐる諸概念でもあつたのだ。

たとえば議会制において、代表する側とされる側との関係がはらむ危うさと不安定性の問題は、もはや、ひとり微に入り細を穿った(政治)哲学的議論の対象ではない。いかなる利害関係からも、したがって、利害をめぐるいかなる代表/表象関係からも放逐された貧困層の増大などに象徴されるように、それはわれわれの社会ではきわめて現実的な問題となって久しいが、このことに関してシュンペーターは、すでに七十年も前に「ブルジョア階級の消滅」という表現とともに明快な予測を立てていた。小市民階級を含むブルジョア中産階級が、経済活動の官僚化とオートメーション化によって徐々に周縁へと追いやりられ、それとともに、彼らにとってはかつて“自由な経済活動”のための桎梏であると同時にその尊大な保護者でもあった議会とその政治的諸権威のあり方もまた、決定的に変質してゆく。これがシュンペーターの見立てであったのだ。「趨勢を伴わない封鎖経済体系」(カレツキ)ではなく、経済をあくまで動態として分析するシュンペーターにとって、議会制=市民社会=資本主義は三幅対なのであり、そのうちのどれが欠けても他の二つは(少なくともそのままのかたちでは)存続し得ない。そうであるならば、中産階級の消滅と共同体の在り様におけるその帰結という問題系は、経済学のみならず政治学の研究領域でもある。本研究では、シュンペーター理論のそうした豊饒さに対して、一定程度、照明を当てることができたのではないかと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 布施哲、「拾われる大衆音楽」、『Autres』、査読無、第4巻、2011年、p.9-18
- ② 布施哲、「資本化と政治的威信」、『思想』(岩波書店)、査読無、1047号、2011年、

p.69-85

- ③ 布施哲、「回帰する人民—ポピュリズムと民主主義の狭間で」『I. R. S—ジャック・ラカン研究』(日本ラカン協会)、査読無、No.9/10、2012年、p.236-263
- ④ 「本源について—わたしたちの政治経済学のための予備的考察」布施哲、『比較マイノリティ学』、査読無、第4号、2013年、p.81-90

[学会発表] (計2件)

- ① 「現代のアソシエーション理論」布施哲、国際シンポジウム・マイノリティ状況と共生言説 II、2011年3月8日、名古屋大学
- ② 「現代政治理論におけるラカン ～E・ラクラウの民主主義理論を中心に～」布施哲、日本ラカン協会、2010年12月5日、専修大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

布施 哲 (FUSE SATOSHI)  
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号：60345840

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし